

豊川市教育委員会生涯学習課

〒441-0292 豊川市赤坂町松本 250 番地（豊川市音羽支所内）

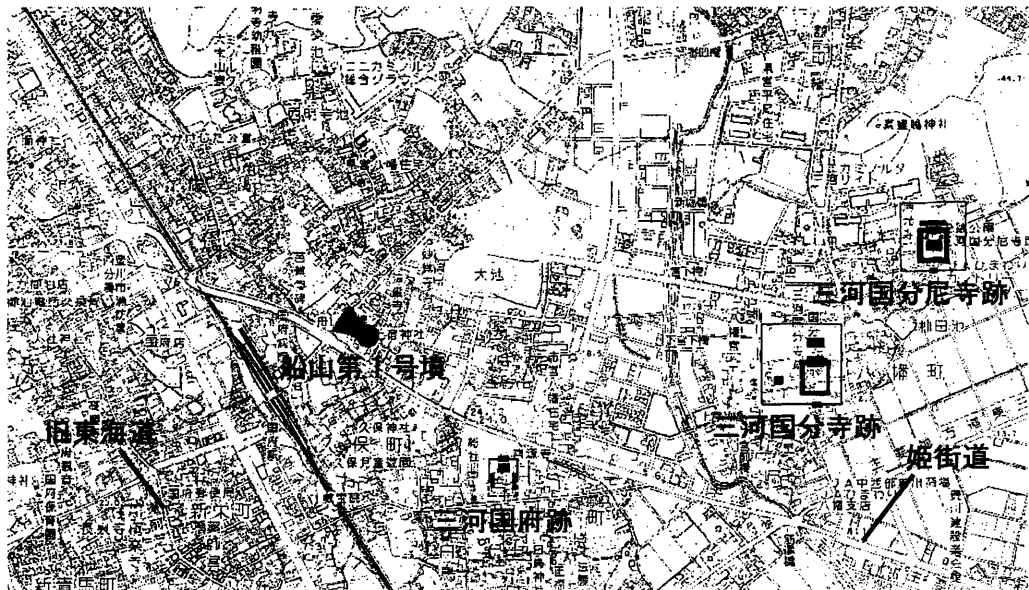
TEL:0533-88-8035 FAX:0533-88-8038

船山第 1 号墳の発掘調査

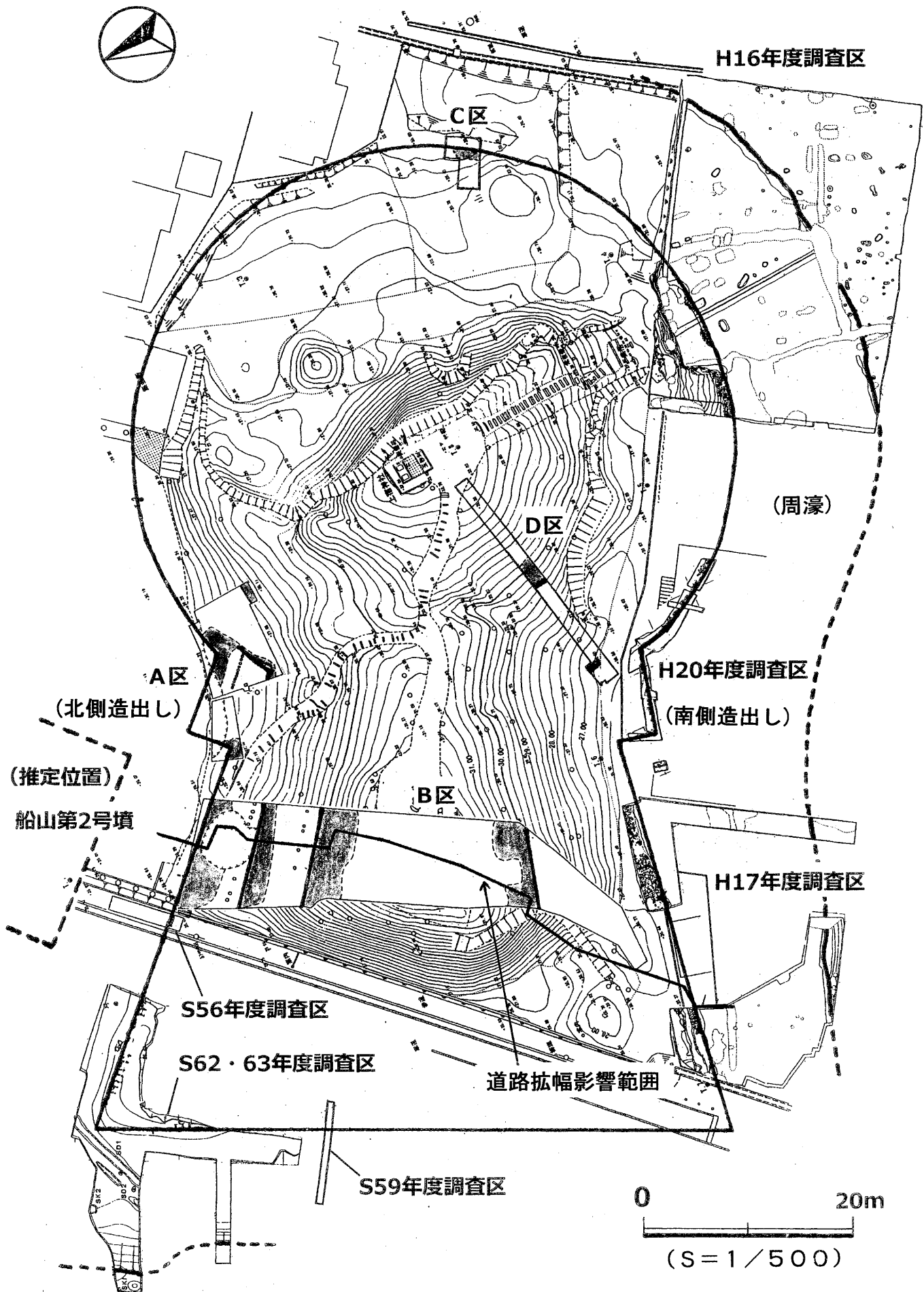
1 はじめに

船山第 1 号墳(豊川市指定史跡)は 5 世紀後半築造の三河地方最大級の前方後円墳として知られ、前方部が昭和 4 年(1929)年の平尾街道開削、後円部が戦前の採土により削平を受けていますが、今なお古墳としての景観を留めています。本古墳は西古瀬川と音羽川にはさまれた洪積台地しろとり（白鳥台地）基部の標高約 26m の場所にあり、西側段丘下には西三河から音羽地区の山あいを越え東三河へぬける旧東海道が通るなど交通の要衝の地でもあります。また、周辺には三河国府や三河国分寺・国分尼寺が置かれるなど、三河の古代史を考える上で重要な地域ともいえます。

本古墳では、これまでに墳裾部で数度の発掘調査が行われその規模等が推測されてきましたが、本年 4 月から 11 月にかけて実施した豊川西部土地区画整理事業に伴う道路拡幅予定地及び保存予定地における墳丘規模や構造を把握するための調査で、前方部・後円部の 3 段構造や葺石、くびれ部の造出し遺構が確認されるなど大きな成果が得られました。ここでは、その概要を紹介いたします。



船山第 1 号墳周辺の史跡



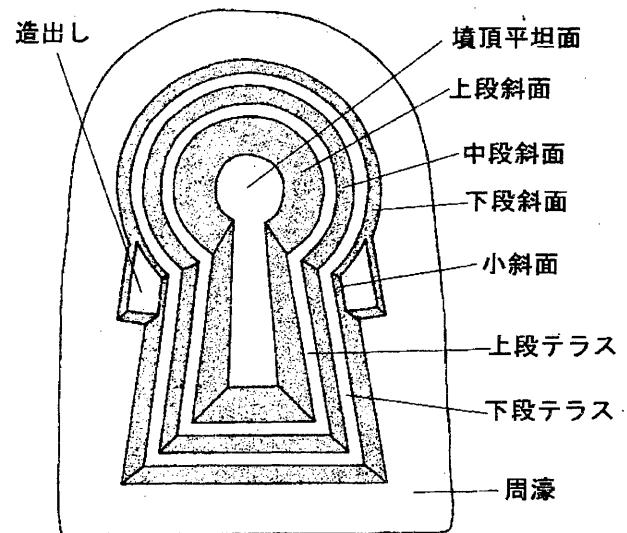
墳丘測量図及び調査区位置図

※網かけは葺石の残存範囲

2 これまでの調査歴など

昭和 20 年(1945)にくびれ部墳頂付近で防空壕が掘られた際、鉄製品(鉄刀3点、鉄鉢3点、鉄鍬約 70 点)が出土しました。戦後の昭和 26 年(1951)に市教育委員会、同 45 年(1970)に愛知県重要遺跡指定促進調査による墳丘測量が実施され、全長 96m、前方部幅 56m、後円部径 50m、高さ 6.5mの数値が得られています。昭和 56 年(1981)には平尾街道拡幅に伴い前方部での土層断面測量が行われ、大まかな墳丘の構築過程が判明しました。その後、昭和 59 年(1984)及び同 62 年(1987)に前方部墳裾で小規模な調査が行われ、翌 63 年には信用金庫建設に伴い前方部北側で発掘調査が行われ、前方部北側コーナーの下段葺石や周濠が確認されたほか、2 基の埴輪転用棺が検出されました。平成以降には、豊川西部土地区画整理事業に伴う調査が行われ、平成 16 年には後円部南側で、翌 17 年には前方部南側で調査が実施され、墳丘下段斜面葺石や周濠が確認されました。また、平成 20 年の集合住宅建設に伴う調査では、南側くびれ部に造出しが存在することが明らかとなっています。このように、船山第 1 号墳は昭和の頃から数回にわたり調査が行われてきましたが、いずれも墳裾および周濠の調査であったことから、墳丘構造についてはよく分かっておらず、その調査が待たれるところでした。

なお、本古墳の北側には陪塚と考えられる船山第 2 号墳(方墳、1 辺約 19.5m)が存在していましたが、昭和 39 年(1964)の調査後に滅失しています。



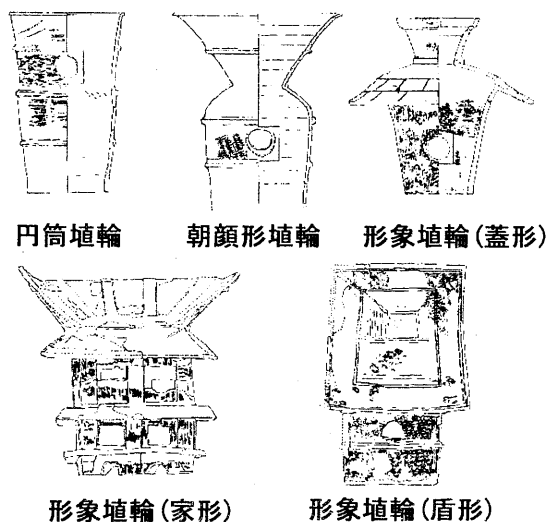
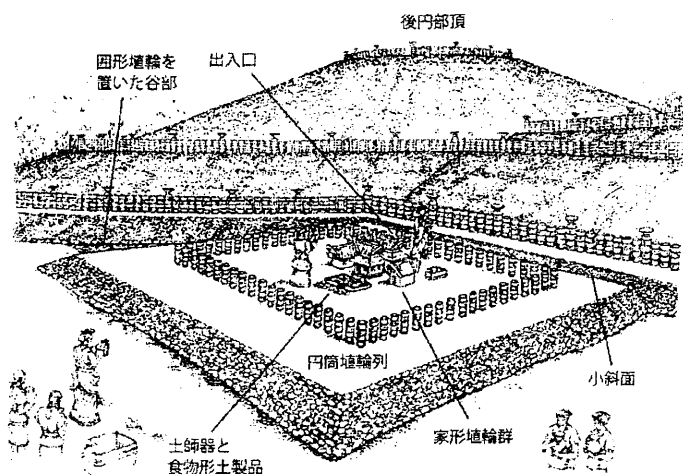
前方後円墳の構造

3 調査成果の概要

A 区

この調査区は、平成 20 年に南側くびれ部で確認された造出しの北側での有無及び、墳丘後円部径を把握するために設定しました。調査の結果、北側くびれ部でも造出しが確認され、その上面には円筒埴輪列(12 個体分)が、墳裾と上面の間の斜面には葺石が良好に残り、造出しの規模(長辺約 8.5m、短辺約 4.5m)を把握することができました。また造出し上面は下段テラス面よりも低く、両者の境には小斜面とよばれる葺石面の存在が確認されました。一方、後円部径については、平成 16・20 年調査のデータで得られる径 54m と A 区の調査データで得られる径 58m と相違があるため、後円部は正円にならない可能性が高いです。その他、後円部中段斜面基底部の葺石も良好に確認され、この部分の葺石は前方部北側中段葺石(B 区)と同様に主に角礫を用いていることが分かりました。また、本古墳ではこれまで形象埴輪は出土していませんでしたが、

A区の調査で家、蓋、盾形の形象埴輪が初めて出土したことは大きな成果といえます(船山第2号墳の調査では形象埴輪の出土が報告されています)。なお、この北側造出しでは南側造出し(D区)で出土した飲食物の供献儀礼に関わる遺物は出土しませんでした。



【参考】 行者塚古墳の西造出し復元図

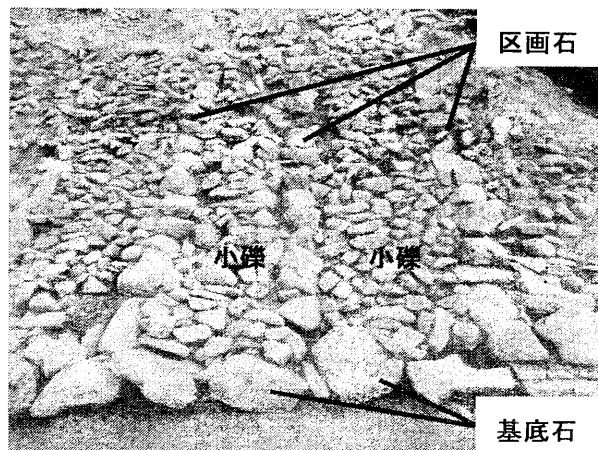
加古川市教育委員会 1997年
『行者塚古墳発掘調査概報』より引用・改変

【参考】 今回出土した埴輪の種類(宝塚1号墳出土品)

松坂市教育委員会 2005年
『史跡 宝塚古墳』より引用・改変

B区

この調査区は区画整理事業で予定される道路拡幅工事の影響箇所調査です。古墳の主軸に直行するように広めの調査区設定を行っており、調査区全域が工事影響範囲ではありません。調査の結果、南側は遺構の残存状況が良くなく上段斜面の葺石が検出されたのみですが、反対の北側では上、中、下段斜面の葺石が比較的良好に確認され、本古墳が3段築成であることが判明しました。葺石は、各斜面の基礎となる最下部に葺かれる大ぶりの石(基底石)、墳頂に向かいやや大ぶりの石を一定間隔で並べて区画を設ける石(区画石)、そしてその区画内に葺かれる小ぶりの石(小礫)に分かれます。そのうち、本古墳の区画石は約0.7~1.0mの間隔で設けられており、他の事例と比べその間隔が狭いところに特徴があるといえます。また、北側では各テラス部におよそ70cm間隔で埴輪列が確認され、上段斜面でも一定量の埴輪が出土したことから、墳頂部にも埴輪列が巡っていたことが想定されます。ところで各斜面の葺石を観察すると、上、下段斜面は丸みのある石(円礫)が、中段斜面は角礫が用いられる傾向があります。この点については、葺石の施工には大量の石を必要とするこ



前方部北側上段斜面の葺石

とから、葺石の採集地が異なっていたことに起因するものではないかと思われます。なお、前方部の墳頂部には調査前に祠^{ほこら}が設けられており、今回その祠を撤去した上で精査を行いました。調査区内において埋葬施設等は確認されませんでした。

C区

この調査区は古墳の主軸上で後円部墳裾を捉え、墳丘の全長を確認する目的で設定しました。後円部は戦前の採土で大きく削平を受けていますが、今回の調査の結果、後円部下段斜面の葺石が部分的に確認され、これにより本墳の全長が約95mとなることが明らかとなりました。

D区

この調査区は後円部の墳丘構造を確認する目的で設定しました。調査の結果、後円部中段斜面の葺石はほとんど流失していましたが、上段の葺石は良好に残存していました。この調査区で検出した上段斜面の葺石は、他の箇所と異なり区画石の縦列が明確に見られないことから、後円部上段斜面のみ葺石の施工方法が異なっている可能性が考えられます。また調査区の西端では南側造出しと下段テラスの間の小斜面の葺石が部分的に確認され、造出し上面で飲食物の供献儀礼に伴う土器類が出土しました。その内訳は土師器小型高坏約25点、土師器はそう^{はじきこがたかつき}2点、^{ざるがたどき}箕形土器約3点、^{さじがたどせいひん}匙形土製品1点、^{いけいちゅうこうどき}異形注口土器1点、食物形土製品（あけび?）2点です。これらの出土品は匙形土製品及び異形注口土器を除き、近畿地方を中心とした特定の首長墓での食物供献儀礼で用いられるものと同じ内容となっています。その他に造出し上面では、墳丘上に立て並べる円筒埴輪を棺に転用した埴輪転用棺^{はにわてんようかん}と推定されるものが確認されています。



南側造出し出土土器類

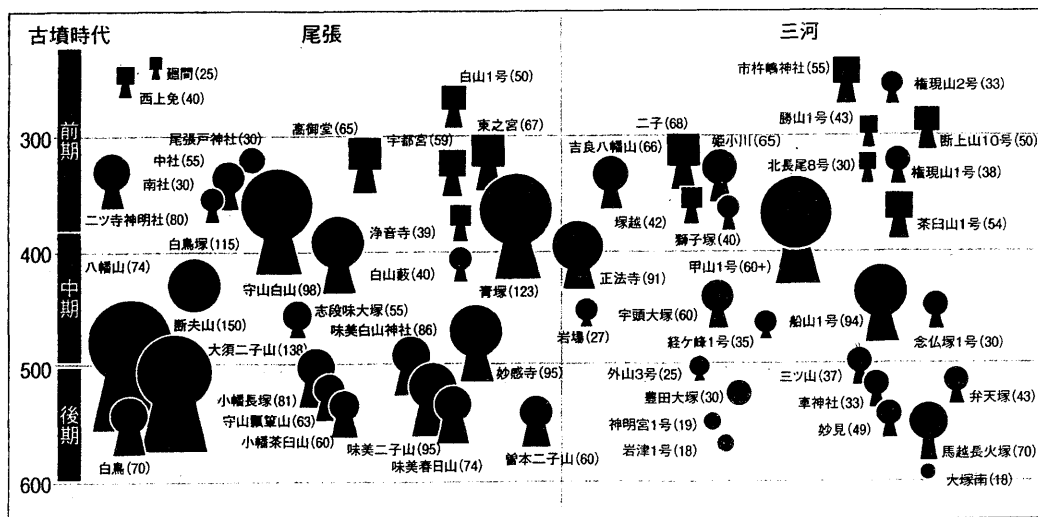
4 おわりに

今回の発掘調査では船山第1号墳の墳丘上に初めて調査区を設けて行い、その結果多くの調査成果を得ることができました。現段階における主な調査成果の概要を以下にまとめます。

まず、A・B・D区の墳丘表面の検出状況より、墳丘構造が前方部・後円部ともに3段築成であることが明らかになったことがあげられます。このような構造の古墳は、大和政権が存在した畿内以外では旧国単位で2~3基程度しかみられないものであり、墳丘規模が三河地方最大級であることも含めると、当地域の古墳の中で最上位に位置付けられるものであり、その被葬者は当地域を治めていた首長であると考えられます。墳丘規模については、これまで測量図などから全

長約 94m と推定されてきましたが、C区で検出された墳丘主軸上の後円部墳裾の基底石と昭和63年の前方部の調査データより約95mであることが明らかとなりました。また、平成20年の調査で南側くびれ部に約8.3×4.0mの造出しが取り付けことが確認されていましたが、A区の調査で北側のくびれ部にもほぼ対称形の造出しが存在することが明らかとなりました。くびれ部の両側に造出しが設けられる事例は地方では確認事例が少なく、造出しの研究を進める上で貴重な調査事例といえます。造出しは、儀礼祭祀を行った場と考えられますが、本古墳でも北側造出しにおいて各地の調査事例にみられる円筒埴輪列が検出されており、その埴輪列で区画された内部空間で、家・蓋・盾形の形象埴輪を用いた儀礼祭祀が行われたと推測されます。一方、D区南側造出し上面では飲食物の供献儀礼で用いたと考えられる土器・土製品が出土しましたが、笊形土器・小型高坏・食物形土製品などは畿内及び周辺地域で見られるものと同じ内容であり、本古墳の被葬者と畿内勢力との関係を示唆しています。この食物供献儀礼の遺物の出土事例は畿内以東では岐阜県大垣市昼飯大塚古墳(前方後円墳:全長150m)、三重県松坂市宝塚1号墳(前方後円墳:全長111m)、三重県桑名市高塚山古墳(前方後円墳:全長50m)で確認されていますが、本古墳における出土はその分布域の新たな東限となるものです。

最後に、本古墳の築造時期については過去に出土した鉄製品や円筒埴輪の形態等より5世紀後葉と推測されてきました。今回の調査で新たに出土した埴輪や、北側造出し付近で出土した須恵器はその形態が5世紀後葉と考えられることから、築造時期はこれまでと同じく5世紀後葉であると推察されます。なお、造出し等で確認される食物供献儀礼に関する遺物の出土年代は、これまでの調査事例では5世紀中葉がその下限でしたが、今回の本古墳での出土はその新たな下限と位置づけられます。



愛知県の主要古墳

西島庸介 2008年「西からみた、東三河の古墳」『史跡シンポジウム 古墳のまち豊橋 私たちがみた、穂の国』資料より引用